北　壁

山岳名著シリーズ

二見書房

昭和46年10月12日　初版発行

著　者　石原慎太郎

印　刷　株式会社堀内印刷所

製　本　株式会社徳住製本所

発　行　株式会社二見書房

0095-710104-7339

振替東京2639番
電話東京(263)0034番
東京都千代田区三崎町2-18-2

北

壁

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

目次

北壁 5
谷川 61
それだけの世界 127
失われた道標 155
あとがき 238

北

壁

その前年、アイガーがプロンピノ、グレッチ、ベルニス、カルネー、そしてヴァイル、クライスの六人の命をその北壁に呑み込んで以来、ベルヌ県庁はアイガーの登山禁止を発令した。

六人の遭難者の内、ベルニス、カルネー、ヴァイルを除いた他の三人の屍体はアイガーの巨大な北壁のいずこかに塗り込められ、度々の捜索にかかわらず未だ発見されていなかった。

が、その禁止令はやがて他の登山家たちの反対にあって撤回されはしたが、スイスのガイドたちが新しい遭難者の出た場合に、救援隊を組織し危険を冒しその救助に当る義務のないことは、又改めて公表されたのだ。しかしそれは殆ど無意味なことに違いはない。初の登攀の栄誉を賭けて北壁に挑むクライマーたちの誰が、仮令今までの遭難率が何程であれ、自分の百パーセントの遭難を期して壁を登るであろうか。そして又、同じ山に生きる、いわば同じ仲間のガイドたちが、いかよう身の危険を感じようと、死に瀕している同僚を見殺しにすることがあり得るだろうか。

その年に入って先ず、ダントレーグ・レルビエ、ブリュネ・ドラリュ、マルセル・ベルモの

フランスパーティが挑戦したが、マルセルは墜死し、他の二人は落石で大きな頭部裂傷を負うたレルビエを肩にして命からがら撃退されて帰っていた。

彼らに次いで、アイマー・ウェスリング、レッタアホーゼ、カール・プロネ、ワルドマンの四人が再度北壁に挑んだ時、世評は暗黙の内に新しい犠牲者を期待したのだ。

アイガーはスイスのベルヌ県グリンデルヴァルトの南部、所謂ベルヌアルペンの北部に高峰ユングフラウ、メンヒに連なってそびえる高度三九七四メートルの巨峰である。一八五八年その頂上が極められ、以来各方面からの登攀が行われていたが、その北壁のルートは未だ開かれずに残っている。そしてこの北壁は毎年幾人かの犠牲者を出し続けていたのだ。

頂上からピラミッド形にほぼ均等な巨大なスペースを持って東西南北に拡がってそそり立つ四面の山容。所謂アイガーヴァントと言われる北壁は頂上の下部東山稜から低下し、やや傾いて北東に走った壁から北西を分けている岩の側壁をもつ岩場となって切り立ってい、特に高度が高くなるにつけ峻嶮な様相を呈していた。

この北壁は日中いかなる時でも日のさす時がなかった。他の山頂やフェースが、緑の谷間に青く暗い影を下しながら真青な空にその稜線を刻んで浮き上る時にも、アイガーヴァントは絶えず、凍結した岩壁を陰鬱な無表情で覆って静まりかえっている。と、時折頂上近い岩壁に発

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

した雪崩が白い氷と雪の飛沫を上げてクーロアールに落下した。そしてその落石と雪崩の下、幾人もの男たちが壁に張りついたまま打ち殺され、あるものは弧を描いて谷底に消えた筈だ。

アイガーヴァントは三つの部分に分けられ、その標高差は殆ど同一であって、岩壁の基部は二二〇〇メートルの高度で岩壁の裾から発し、二八〇〇メートルの標高にまで達している。第二の部分は三四〇〇メートルまで延び、ここに三つの雪壁地帯がある。最後の部分は垂直に近い壁であって、それが三九七四メートルの頂上に及んでいるのだ。この最後の部分に「蜘蛛」と呼ばれる雪田と凍った岩がまだらに拡がった雪壁があった。

ウェスリング等三人が、遅れて落ち合う筈のワルドマンを待つためにグリンデルヴァルトに着き、その町の知人の家に滞在している時、カール・プロネが案内所で聞き込みをして帰った。ウインから来て、かねてから北壁研究中であったシュテーラーとギルマーの二人が、彼らの登攀計画を聞き一足先にパーティを組んで出発したと言うのだ。

すべてのクライマーたちがそうであるように、彼らも又その先達者達の壮挙が見事成功することを同じ仲間として祈りながらも、反面予定より遅れるワルドマンを待ちながら激しい焦躁に襲われるのをいかんともしがたかった。

彼らより先に出発したシュテーラーとギルマーの二人が、どれほどの時間と資料によって、

どのような研究と判断を持ち出したかはわからない。
が、彼らの登攀はスタートからしてアイガーヴァントのスケールを山麓から目測によって測定した誤算を、すでに明らかにしていたようである。彼らはいきなり直立した壁の取りつきのオーヴァーハングをトラバースせずに直登しようとしたのだ。それは三時間の悪闘の末不成功に終り、彼らはその下で最初のビイヴァークを行った。
翌日は日暮間近く、前述の雪壁の第一の部分に至ってそこで第二のビイヴァークを行った。三日目は一日目の無謀な登攀での体力の消耗が祟り彼らの登攀は遅々としてはかどらずに終った。加えて第二夜から、アイガーにはつきものの嵐がその猛威をふるったのだ。山麓ですら零下九度を記録した。その夜を狭い岩の上ですごした後、三日目彼らは第二番目の雪壁の上部で三度目のビイヴァークを行ったのだ。
四日目、霧がようやく僅かの切れ目を見せた午過ぎ、グリンデルヴァルトとクライネ・シャイデから、二人を見守っていた望遠鏡はつかの間三番目の雪壁で著しく行動の速度を減じのろのろと動く二人を認めた。
そしてその後二日、アイガーは険悪な嵐を包んだ雲と霧の厚いヴェールにその面を塗り込め、山麓の視界から永久にこの二人を奪ったのだ。
三日目、ようやく晴間を見せた厚い霧の間をぬって人々は望遠鏡で必死に北壁の上に二人の

姿を捜したが見当らなかった。飛行機による捜索も行われはしたが、晴れ切らぬ霧にわざわいされ何を見出すことも出来なかった。

最早二人の死は確定的であった。

ギルマーたちが見失われて次の日、遅れて到着したワルドマンを加えてウェスリング等のパーティ四人は、グリンデルヴァルトの町で、今年に入って再度北壁からもたらされた仲間の訃報を無表情に聞いた。

周囲の人々がこの知らせによって、三度同じ冒険を繰り返そうとする彼らに何を言おうと、同僚の死をいたみながらも、その反面胸に秘めた、自らも一瞬はっとする冷酷な安堵と、不遜の闘志を改めて感じながら、四日このかた続いた荒天候の蔭で、やがて又来たるものを見下して待ちかまえているであろうアイガーヴァントを仰いで射すような眼差しに振り返って見るのだ。

ウェスリングたちが立てた計画から見れば、あるいはシュテーラーたちの遭難はひとつの暴挙、或いは猪突の当然な悲劇的結末かも知れぬ。がしかしそれは、あくまで後人の言うところだろう。彼らもまた、現実そのアイス・ピッケルでステップを切りながらあの雪渓を登って行った時、全く想いもよらなかったアイガーの猛威の前に屈するかも知れまい。

『かかる方法によって、無慚にも自らの生命を捨てることが、人間にとって最大の罪悪でなく

てなんであろうか——』

そう記したジャーナリストの発言も、或いは又当然であるかも知れない。

『記者にとっては、人間にとって罪悪であり、且つ又最も愚かしい行為であるとしか思えぬかかる登攀が、再度又再度、こりることなくひとつの英雄的讃仰の内にくり返されることは果して許され得べきことだろうか——。記者はここに又、嘗つて幾度かきりなく繰り返されて来た質問を反復したい。彼らは一体、どうして、何のためにそれを行うのか？

十三年前、エヴェレストのイェローバンドに消えて再び還らなかったマロリイの言った如く、彼らも又、「アイガーの北壁が、ここにあるが故に」と答えるのであろうか？　いや記者はすでにこの答を信じない。彼らの情熱が、アイガーヴァントの存在をそこに認めて彼らをそこに向わしめると言うよりも、彼らは確かに、何ものかに憑かれた人であると言えよう——』

が記者のその言も当るまい。それへの解答を、言葉にして言い得るクライマーが一体何処にいるだろうか。凍てついた岩棚でのビイヴァーク、喘ぎながらザックをかついで登る岩壁、凍って感覚の鈍った指をせめつつ刻むステップ、虚脱した眼に最後の力をこめてさぐるザイル、その一瞬一瞬彼らは自分に同じことを問いつづけている筈だ。

そして、その答は、登頂の一瞬、足をふまえて立った時の、全身の虚脱に近い疲労を吹き飛ばした、というのは偽りであろう、その虚脱の内にも、再びその身をしめつけ、或いは解きほ

ぐし、一種の解体の陶酔に近い感慨の内に感じ取る勝利の寸刻、或いは、撃退され、友を喪い、傷つき、足を引きずって山麓に下り立った時、今一度万感こめて虚ろな瞳に己を下した自然の偉容を見上げた時の敗退の感慨、それらすべての総括が、彼らを駆り立てる何ものかへの疑問に対する、答にならざる答ではなかったか。

勝利を得んがための、臆病とまでいえる細心さ、そして、理性が勇気を駆り、又勇気が理性を駆って進む、無くてはならぬ総ての完全さ。登山の唯一のルールである、死んではならぬと言うこと。唯一度の失策も許されはしない。それを守り抜くためには、一瞬の冒険を企て、賭をしようとする己に打ち勝つ理性を失ってはならない。

がそれをもっていながらも尚、人間は狂暴で冷酷な自然のたくらんだ罠に陥ちて還ることがないのだ。

ウェスリングたちは、彼らを次の北壁の犠牲者と見たてて言う人々の言葉を黙って聞き流した。

或いは人々の言うところこそ結果においては正しいかも知れぬ。嘗つて組まれた十幾つの登攀パーティのどれが、無論登攀の完遂とまでは行かなくとも、九〇パーセントに近い成功を記録したと言うのか。雪壁までたどりついて、何らの犠牲を払わずに帰投し得たパーティはひと

つとして無かったではないか。

彼らもまた同じそのひとつとして、同じような結論をたどって終らぬと誰が言えようか。が、果して又彼らが絶対に成功し得ぬとも他の誰が言えよう。それを知るものは何ものでもない。

アイガーの北壁だけである。

いや、知るものは登攀者彼自身である。彼らの誰が、己の勝利以外の何を知ろう。そして又、それを知りつつ、彼らは敗れるのだ。

シュテーラーたちが見失われてから四日間アイガーの周りは嵐を乗せた雲が渦巻いて立ちこめた。四日目は一日中凍るような雨が降りしきった。翌日六月三十日、空は晴れ間が見えたが、アイガーヴァントは大部分雲に覆われて見えない。がプロネが天気予報を調べると天気は好転する見込みとある。彼らは出発を翌日に決めた。こう続いた悪天候の後には大抵、幾日か好天気が続く筈だ。が、これが彼らにとっての言わば第一の誤算であったかも知れぬ。

レッタアホーゼが登攀に持参する荷物を点検した。ロック・ハーケン四十五本、アイス・ハーケン十五本。カラビナ十五個。ロック・ハンマー、アイス・バイム、ピッケル長短四本、三十メートルのザイル三本、同長の懸垂用のザイル二本、ラジュース、ウィンドズボン、アノラック等々。まとめてそれぞれザックにつめると、少くしたつもりでも可成りの量となる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo